

## 医学教育振興財団の活動（1982～1986年）<sup>\*1</sup>

西園 昌久<sup>\*2</sup>

### 1. 医学教育振興財団の事業目的と沿革

今日、医学教育の改善への期待は関係者の間で非常に高まっている。諸外国の現状をみても、イギリスでは General Medical Council, アメリカでは American Association of Medical Colleges が、それぞれの国の医学教育の改善のために不断の努力を行っている。また、World Health Organization では、マンパワー政策の一環として医学教育の変化を大きな目標の1つとしている。さらに、アメリカやドイツでは、医師免許を与えるための独立の医師資格試験機関があって、絶えず適正妥当な評価方法をあみだすよう研究がなされている。こうした国外の動きとともに、わが国内においても、全国医学部長病院長会議、日本医学教育学会、国立医学部長会議、私立医科大学協会など、いろいろの団体、さらには各大学において医学教育の改革に向けて絶ゆまない努力がなされている。こうした状況を反映して設立されたのが医学教育振興財団である。

“日本ならびに諸外国の医学教育（卒後の臨床研修を含む）の方向と実情とに関し、不断の調査研究を行い、その成果を医学教育機関に提供するなど、日本における医学教育の充実向上について寄与し、もって医学の振興と人類の福祉に貢献することを目的とする”。（寄附行為第3条）

このような目的で、1979年4月医学教育振興財団として発足。現在、一般会員79大学（国公私立

医科大学医学部）、賛助会員56社、理事長：懸田克躬、事務所：東京都千代田区永田町2丁目16番2号、星陵会館1階、電話03(593)1324（代表）。

### 2. 事業内容

本財団設立の目的を達成するため、以下の内容の事業を行うことが計画されている。

- 1) 医学教育に関する調査、研究および資料の収集ならびにその成果の医学教育機関への提供。
- 2) 医学教育の方法の研究に対する助成。
- 3) 医学教育機関の教職員に対する研修の実施および援助。
- 4) 医学教育資料の発行等医学教育機関から委託された事業。
- 5) その他目的を達成するための事業。

### 3. 1982～1986年間の実際の活動

この5年間に実際どのような活動がなされたか、その主なものについて報告する。

#### 1) 医学教育に関する研究ならびに資料の収集

##### (1) 国内医科大学視察と討論の会

国内の医科大学を1校選び、医学教育のシステム・カリキュラム等について実地に視察し、参加者の間で討論する会が年1回開催されてきた。

- |            |      |           |
|------------|------|-----------|
| 1982年（第2回） | 川崎医大 | 参加者36校40名 |
| 1983年（第3回） | 浜松医大 | 参加者38校39名 |
| 1984年（第4回） | 自治医大 | 参加者42校50名 |
| 1985年（第5回） | 佐賀医大 | 参加者36校47名 |

これまで、東日本・西日本交互に、また国立私立交互に行われてきた。新しく設立された大学での実際の教育について、その特徴と問題点を明らかにしてきた。参加者は国公私立、また新旧の区別なく幅広く全国から得られている。今後はさらに、いろいろな大学へ広がるであろう。

<sup>\*1</sup> Report on the Japan Medical Education Foundation (1982-1986).

**キーワードズ**：国内医科大学視察と討論の会・New MCAT 研究会・医学教育シンポジウム・医学教育研究助成

<sup>\*2</sup> NISHIZONO, Masahisa 福岡大学医学部精神医学教室

(2) 海外諸国における医学教育事情調査

1983年、アメリカにおける医学教育事情調査(懸田克躬理事長、川崎明徳理事、紀伊國献三参与)を行った。当時、わが国の医師国家試験の改善が図られていたので、その点で先進的立場にあるアメリカの事情を実際に把握するため出張。1985年懸田克躬理事長が団長となって、文部省国公立医大関係者9名からなる「アメリカ医学教育事情調査」に本財団は協力した。これは文部省の医学教育改善のための調査協力者会議に資するためのものである。

(3) New MCAT 研究会

今日、医科大学入学選抜はますます重要な課題になってきている。医師としての資質はただ単に記憶量を問題にする学科試験では不十分であるという認識が高まってきたからである。もちろん、わが国の医科大学・医学部においても、学科試験ばかりでなく、高校調査書、面接、小論文などの多面的試験方法を取り入れているところが急速に増加している。さらには、推薦入学制度を導入した大学がみられるようになったのも、こうした医師の資質を重視した試みと関連したものであろう。

しかし、医師の資質と一口でいっても、その内容になると必ずしも関係者の間で意見の一致をみているとはいえない。そこで注目されたのが、アメリカ医科大学協会で1974年から準備が始められ、1977年から導入された New Medical College Admission Test (New MCAT) の中の Skills Analysis 法である。アメリカの New MCAT は、学科試験、科学的論理性を問う問題、そして問題解決能力を問う Skills Analysis 法の3種類よりなる。その中で Skills Analysis 法は、医師の臨床活動は患者の提供する言語的・非言語的情報を把握、認識、判断し、解決法を編み出すという精神活動を通じてなされることに着目したものである。文章の読解力を問題にする Reading と数量の処理能力を問題にする Quantative よりなる。この Skills Analysis は、新しい評価法といえるであろう。本財団でもこの Skills Analysis 法の特徴、わが国に導入することの可否などについて検討をすることになり、New MCAT 研究会を財団の事業として発足させた。現在、研究会参加者

表 1 New MCAT (New Medical College Admission Test) 研究会

西園昌久 (理事), 一戸孝七 (岩手), 渡辺陽之輔 (慶応), 菊池正一 (順天堂), 織畑秀夫 (東京女子), 伊藤武雄 (杏林), 岡部治弥 (北里), 佐々木正五・岡 哲雄 (東海), 梶江 勇 (愛知), 尾島昭次 (岐阜), 木原 隆・東 郁郎 (大阪医), 徳永力雄 (関西), 山下貢司・勝村達喜 (川崎), 尾崎文雄 (高知), 松岡雄治 (福岡)
--

は表1のとおりである。

1983~84年にかけて、すでに New MCAT 方式の入学選抜を実施している福岡大学医学部で作成された試験問題を各大学で在学生の協力を得て実施し、その結果、この Skills Analysis 法は、従来の学科試験、小論文、面接とは違った精神的側面をみていることは確かなようである。端的に述べるならば、「潜在的精神活動ポテンシャル」であろうと結論づけられた。したがって、研究会メンバーで独自の問題作成を行うことになり、1984~85年にかけてそれを実施した。その問題で各大学新入学生に実施した。今後、新入学生の追跡調査を行い相関をみることに、さらに、各問題についての再検討、新しい問題作成などにあたり、Skills Analysis 法のわが国への適用の可否について、いっそうの研究を進めている。

2) 医学教育研究に対する助成

医学教育に関する調査研究に従事している者、またはこれに準ずる者に対し、基礎・臨床を問わず医学教育に関する調査研究の助成を執行してきた。

1982年 (第4回)	応募33件	助成7件
1983年 (第5回)	応募35件	助成8件
1984年 (第6回)	応募35件	助成5件
1985年 (第7回)	応募36件	助成10件

各年度とも、4月初めに公募し、応募について審査委員会にはかり審査を行い決定している。この期間の助成者一覧は、表2のとおりである。なお、日本医学教育学会大会にも助成の一環として財政的援助がなされている。また、1985年から助成の対象となった研究会が行われている。

3) 医学教育シンポジウム等開催

(1) 全国的なシンポジウム

1. 1982年第3回医学教育シンポジウム

表 2 医学教育研究助成者一覧 (昭和57年度～昭和60年度)

一般研究

年度	氏名	大学名・役職名	専攻学科	研究課題	助成額
57	竹村 堅次	昭和大・病院長	精神医学	精神科領域における医師卒後研修のあり方, とくに臨床チームワークの完成過程についての研究	500,000円
	谷 莊吉	金沢医大・教授	医動物学	医学教育における Death Education の必要性について	500,000円
	星野 孝	福井医大・教授	免疫寄生虫学	基礎医学と臨床医学のインテグレーションに関する研究	500,000円
	星野 宗光	名古屋大・教授	病理学	高学年学部学生を対象とした剖検症例検討会の教育効果の評価	500,000円
	阿部 正和	慈恵医大・教授	内科学	良医をつくる医学教育—病気を診ずして病人を診よ— (第14回日本医学教育学会大会への助成)	500,000円
58	杉山 善郎	札幌医大・教授	心理学	「医学教育就学適性テスト」(仮称)の作成	500,000円
	曾我部博文	自治医大・教授	薬理学	講義を行わないカリキュラムの研究	400,000円
	大菅 俊明	筑波大・教授	内科学	レジデントシステムによる卒後臨床教育の整備に関する研究	500,000円
	石川 友衛	日本大・教授	生理学	医学部学生の文献検索の教育に関する研究	500,000円
	山根 洋右	島根医大・教授	環境保健医学	卒前医学教育における Family Medicine の導入に関する理論と技術の開発	400,000円
	伊藤 洋平	京都大・教授	微生物学	21世紀をめざす医学教育 (第15回日本医学教育学会大会への助成)	500,000円
59	坂上 正道	北里大・教授	小児科学	医学原論研究部門の運営及び医学原論の研究	500,000円
	古川 俊之	東京大・教授	医用生体工学	知能 CAI システムの医学教育への応用—事前評価のための基礎研究	500,000円
	阿南 功一	筑波大・学群長	生化学	卒前医学教育における評価方法の研究	500,000円
	鳥居 有人	国立立川病院・病院長	外科学	一貫性のある医学教育研究・研修 (第16回日本医学教育学会大会への助成)	500,000円
60	鈴木 庄亮	群馬大・教授	公衆衛生学	入学後の学生の成績等からみた入学者選抜方法の評価についての研究	400,000円
	馬詰 良樹	慈恵医大・教授	生理学	医学教育における健康医学の導入に関する教育	400,000円
	中山 英明	鳥取大・教授	公衆衛生学	衛生学・公衆衛生学実習に関する調査研究	396,000円
	寺嶋 真一	琉球大・教授	生理学	医学・保健学の包括的カリキュラムの研究	400,000円
	赤井契一郎	杏林大・教授	病理学	一新設医科大学卒業生医師の動向とその意識調査	400,000円
	森 忠三	島根医大・教授	小児科学	小児のプライマリケアに関する CAI 開発	400,000円
	山内 春夫	新潟大・教授	法医学	死亡診断書及び死体検案書の作成についての講義実習のための調査・研究	400,000円
	西園 昌久	福岡大・教授	精神医学	医学教育はどのように変わったか—これからの課題 (第17回日本医学教育学会大会への助成)	500,000円

表 2 つづき

グループ研究

年度	氏名	大学名・役職名	専攻学科	研究課題	助成額
57	平 則夫	東北大・教授	薬理学	基礎医学における薬理学実習の在り方についての研究	1,000,000円
	和田 義郎	名古屋市大・教授	小児科学	新生児・未熟児医療についての医学教育システム化に関する研究	1,500,000円
58	斎藤 泰一	川崎医大・教授	薬理学	多肢選択テストが医学教育に及ぼす影響	1,250,000円
	青山 英康	岡山大・教授	衛生・公衆衛生学	医学教育における衛生・公衆衛生学の教育計画	1,550,000円
59	静田 裕	高知医大・教授	医化学	新設医科大学における基礎医学教育の現状と将来への展望	1,800,000円
60	静田 裕	高知医大・教授	生化学	新設医科大学における基礎医学教育の現状と将来への展望	500,000円
	上田 敏	東京大・教授	リハビリテーション医学	リハビリテーション医学に関する医学教育の現状及び問題点の調査研究	1,500,000円

「卒前教育と卒後教育」1982年10月29日順天堂大学。司会：懸田克躬，牛場大蔵，紀伊國献三，演者：吉利 和，水越 治，中尾喜久，松浦啓一，伊藤忠厚，指定討論者：福岡誠之，真島英信。

2. 1983年第4回医学教育シンポジウム

「英国の医学教育に学ぶもの」1983年11月12日星陵会館。司会：懸田克躬，牛場大蔵，紀伊國献三，演者：Sir John Walton, Prof. R.M. Harden, 中島 章，星 猛，松本武四郎。

3. 1984年第5回医学教育シンポジウム

「医師資格試験はいかにあるべきか——その改善に向けて」1984年11月16日星陵会館。司会：牛場大蔵，懸田克躬，紀伊國献三，西園昌久。演者：Dr. E. J. Levit, Dr. H. J. Kraemer, Dr. C. F. Schumacher, Dr. K. Voigtmann, 阿部令彦，前川 正。

(2) 医学教育講演会 New MCAT 研究会

1986年1月16日東海大学校友会館。司会：懸田克躬，紀伊國献三，演者：Dr. J. Cooper, Dr. A.G. Swanson。

(3) 地区別医学教育シンポジウム

医学教育の改善をいっそう浸透させる目的から，1985年度から全国を地区別に区分し，シンポジウムを開催することにした。これまでに開かれたのは，

(a) 第1回北海道・東北地区医学教育シンポジウム。1985年9月13日東北大学

(b) 第1回九州地区医学教育シンポジウム。1986年1月20日長崎大学

いずれのシンポジウムも，「入学者選抜方法の改善」「医学教育の特質に応じた教育方法の改善」がテーマとして取り上げられた。なお九州地区にはアメリカ医科大学協会長 Dr. J. Cooper, 部長 Dr. A.G. Swanson が参加。

4) 医学教育機関の教職員の研修

毎年1回文部省・厚生省共催，日本医学教育学会の協力で行われる「医学教育者のためのワークショップ」へ協力機関として参加した。この間，第9～12回同ワークショップが行われた。

5) 図書その他医学教育関係資料刊行

1982年「英国の医学教育」

1982年「第3回医学教育シンポジウム報告書」

1986年「第4回医学教育シンポジウム報告書」「第5回医学教育シンポジウム報告書」。なお引き続き，米国医学教育調査報告書，医学教育講演会報告書，New MCAT 研究会報告書，21世紀の医師像（JPEP 報告書翻訳）を刊行予定である。

また，国内医科大学視察と討論の会報告書を毎回刊行（2～5回）。さらに広報誌 JMEF (Japan Medical Education Foundation) を刊行している。

むすび

本財団の事業も急速に拡大している。現在新た

に、WHO 西太平洋地域事務局との共催で、「地域社会ニーズの変化と将来の医学教育」というテーマで国内外の医学教育関係者を対象にした国際医学教育会議、さらに、学長あるいは医学部長を対象にした医学教育指導者セミナーが企画されて

いる。伝統的なアカデミックな医学教育が今なお主流であるのが今日のわが国の現状で、それは医療体制と深くかかわっていることであるが、そのままではよいのかという問いかけが本財団の活動の原動力となっているのは確かであろう。